
気付けばゲームの世界

山田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気付けばゲームの世界

【Nコード】

N6163Z

【作者名】

山田

【あらすじ】

気付けばゲームの世界にいた私と仲間の人たち。

何故この世界に來たのだろうと、混乱しながらも進もうとするお話。

1話

いつものようにネットゲームをプレイして、いつものように寝るはずだった。

それがなぜ、私は非現実世界（ゲームの世界）にいるのでしょうか！！！？

始まりはゲームのサイトトップに掲載されたイベント告知。
タイトルは確か”腕に自信のあるチームのみ参加せよ！”だったはず。

チームの構成は6人でLVは最高値の者のみ受付とのことだったので高レベルのダンジョンに向かう際には大抵一緒にいた人達と組んでそのイベントに参加申し込みしたところ
なぜかゲームの世界にも入ってしまったという
意味がわからない状態になっている。

私の格好は頭がすっぽり隠れる厳つい兜に、上着は皮で出来た動きやすい服、下はズボンに膝まである皮で出来たブーツを履いている。グローブもはめているため肌が出ている部分はどこにもないし、体の線が出ない服を着ているから外見からは分からないけど
黒髪黒目の平凡な顔立ちの女のキャラだ。

このキャラクターを作ったときのコンセプトは”厳ついものを着ているが実は女！”だ。

声は女の声なので実は何もなくバレてしまうのだが、時たま、声は女で体は男というネタキャラをつくっている人もいるので、完璧にばれているわけではないと思いたい。

まあ女性が厳ついものを着ているのいいよね！って軽いのりで作っただけなので女であるということ隠したかったわけじゃないから別にいいんですけどね。

因みにこのキャラクターの職業は弓使い。

上から下まで鎧を着たかった私としては剣士や重剣士になればよかったのだけど

ギルドにも入らずクエストも基本一人で終わらせるスタイルが出来るようにと考えていたので、職業が限られてくる。

剣士や重剣士では探索スキルやそれ変わるスキルがなく一人で行動するには操作するもの自身のスキルが高くないと難しい。

限られた中で一番厳つい格好が出来るものとなったら弓使いだったのだ。

それでも高レベルになると一人の力では進めない難しいダンジョンがあり

その時は一緒に連れて行ってもらうパーティーが今回事件？に巻き込まれた仲間だったりする。

突然の異世界トリップに私たち6人はパニックに陥っていたのだけど空が夕焼け色に変わり、お腹がすいた頃には表面上では落ち着きを取り戻していた。

「・・・ここで野宿は不味いから、いったん町へ行かないか？」
このパーティーを組んだとき何時もリーダーの役目を担う剣士が提

案する。

この剣士の人は基本ソロプレイの私としては珍しく、よく話していた人でゲーム中では一番仲が良い。

まだ呆けた状態が続いているので、知り合いで、なおかつ誘導してくれる人がいることはとても有難かった。

「よっしゃ。じゃあサッサといくべ？でも、この荷物どうするよ。」
それに軽く答えたのは暗殺士の人。

この人は他のみんなと違い、この世界に来たことを素直に喜んだただ一人の人だ。

因みに剣士の人と暗殺士の人は同じギルドで、2人はかなり仲が良く、以前聞いた話ではリアルでの友達らしい。

先ほども仲良く2人だけで話し合いをしていた。

いや、話し合いというか、暗殺士の人が興奮して騒ぎ立てるのに剣士の人が突っ込みを入れたり怒ったりしていただけたが。

「えーと、金は絶対に持っていくとして、クエスト用のアイテムとかは置いていこう。

手に持ちきれないけど、絶対に持って行きたいものがある人は言ってくれ。」

ゲームの中では30種類の荷物をかばんに入れて持ち運ぶことができたけど

現実ではそうもいかないらしく、辺りにはゲームのキャラクターに持たせていた荷物が散らばっている。

ここから町に行くとなると、多少はモンスターに出会うことになる。そうになると、弓使いである私は両手が開いていて身軽でないと戦えない。

つまり、お金と飲み物・食べ物・武器以外は置いていかないといけないのだ。

私はゆっくり立ち上がると、目の前に落ちていた弓と弓矢を一番に背負った。

弓を手に持った瞬間、不思議な感覚が広がる。

続けて右側に落ちていた1本の短剣を腰に挿し、人差し指ほどの針を30本拾って右のポケットに入れる。

お金を左のポケットに入れて、HP回復用の飲み物2本と食べ物2つを腰に下げた袋に入れた。

さて、私は準備万端だ。

剣士と暗殺士の人は持っていく物の重要度でもめているようだ。

この2人のほかには、重剣士(男)と魔法使い(女)、僧侶(女)がいて

重剣士の人はすでに荷物をまとめたらしく、大きな袋を横に置き、太い剣と重そうな盾を木に立てかけ、その前に座り込んでいる。

魔法使いの人はぶつぶつ独り言を言いながら、未だ何を持っていくかで迷っているらしい。

僧侶の人は・・・なぜだか私の目の前にいる。

「何でしょうか。」

「服をくれ!」

えーと。僧侶の人の服装は豊かな胸と細い綺麗な足を際どい所まで

外に出していて布の面積が小さく寒そうだ。

まあ、寒さ以上に恥ずかしいだろうけど。
でも。

「可愛い服装なら、サラディアさんに譲ってもらったほうがいいんじゃないですか？それともサラディアさん、手持ちでは持っていなかったとか？」

「そうじゃなくて・・・！おれは・・・こんな・・・なりたかったんじゃないくて・・・うあー！！！」

僧侶の人が手を顔に当て、膝をつく。

なんだなんだ。

心配してくれたのか、好奇心なのか、剣士・暗殺士・魔法使いの3人が揃ってこっちに来てくれた。

「あ、サラディアさん。キラキラマジックさんが服が欲しいこのことなので、譲ってあげてくれませんか？」

キラキラマジックさんとは僧侶の人のことで、彼女は人一倍おしゃれにうるさい。

ゲームのアップデートで新衣装が出るとチェックをして気に入ったものがあれば速攻手に入れているほどで

そんな彼女が満足するような可愛い衣装を私は持ち合わせていない。

その言葉と、この状況にサラディアさんと剣士の人と暗殺士の人とは納得したようだ。

「ディディアちゃん。こいつ男だから、よければディディアちゃんのやつ、ズボンとか体が隠れるやつだから貸したげて？」

暗殺士の人が笑いをこらえながら言う。

因みにディディアとは私のこのキャラクターでの名前だ。

「俺とこいつの装備じゃあ合わないだろうし、サラディアの女っぽい服も着たくないんじゃない？」

暗殺士の人の言葉にキラキラさんは悔しそうにうなづく。

基本的に私は手荷物の中に余分な服は入れていない。

何時も入れている人はお洒落用の服を持っている人だろう。

でも、こっちの世界に来る前に反復クエストをしてモンスターを狩りまくっていたので

品物のレベルは低いけど売ってお金にしようと思っていたから、何点か装備品を拾って持っていた。

「それでは、えーと。これなんかどうでしょうか。」

周りをきよろきよろ見渡して、お目当てのものを拾い上げる。

私が今来ているものより少し生地が薄く、装飾品も少なく地味な上下の装備品。

「ありがとう。」

そう言ったキラキラさんは今来ている服の上に私の渡した服を急いで着た。

まあ、下着みたいな衣装だったからね。

しかし、異世界に來ただけでもどうしようって感じなのに、さらに性別まで変わるって・・・。

顔を青くして下を向いている巨乳金髪碧眼の美人の中身が実は男とか・・・。

「キラキラさん。ファイトです。」

「キラキラって言うな。」

同情して勇気付けたところ、睨みつきで返されました。

「では、なんと呼べば？」

「・・・タケシ・・・いや、キラで・・・。」

うん。タケシが本名なんだろうけど、その姿では無理があるからね。

「で。皆準備はできたか？」

剣士の人が中央に立ちみんなを集める。

「なあ。まじでこれ持って行こうぜ。絶対金になるから！俺めっちゃがんばって集めたんだぜこれ！」

暗殺士の人がピョンピョン跳ねながらこちらにアピールしてくる。足元には拳大の宝石がキラキラ輝いていた。

「30個あるから、一人5個ノルマでどうよ。」

暗殺士の人言葉に魔法使いのサラディアさんが反論する。

「無理。これ以上持てないから。」

サラディアさんの右手には自身の身長ほどの杖、左手には短剣。腰にはMP回復用の葉がずらりと並んでいた。

「短剣を腰に挿して宝石を袋に入れて左手に持ったらいけるんじゃない？」

サラディアさんは首を振る。

「無理。これ以上持ったら私途中で座り込むよ。」

暗殺士の人とサラディアさんがにらみ合っていると、今まで黙っていた重剣士の人が声をかけてきた。

「じゃあ、俺が持つ。」

左手に重そうな盾を持って、後ろに剣を付け、その上に大きな荷物をかけている状態でさらに持とうというのだろうか。

「この体だとまだまだ持てる。」

なんと。もしかして、ゲームのステータスがすべてこの身に反映さ

れているのだろうか。

暗殺士の人が調子に乗って、30個すべての宝石を袋につめ重剣士の人に渡すと

苦もなく、ひょいっと肩に担いだ。

暗殺士の人でさえ引きずっていたというのに、恐るべし重剣士！

いや、そもそも暗殺士もそこまで体力なかったか。

とにかく、移動の準備ができた私たちは町のほうへ足を進める。ゲームの世界の地図と同じであるようお願いながら。

2話

1時間ほどゲームの記憶を頼りに歩いていると、大きな川と石で作られた橋が見えた。

その橋が見えたとき、たんに皆の顔が笑顔になる。

端の向こうに町が小さく見えたからだ。

暗殺士の人々が橋に向かって駆け出そうとした瞬間

水の中から鰐のようなモンスターが這い上がってきた。

すかさず私は弓を構える。

その瞬間、なぜか今までゲームの中で習得したスキルがどうすれば使えるのか理解できていた。

弓を拾った時から薄々、私はこの弓を使いこなせるとどこかで感じたのだけど、構えたことでそれは確信に変わる。

鰐のようなモンスターはゲームの中にも存在していたので、攻撃パターンは知っている。

意外に移動速度が早いモンスターなので、呪文を唱え弓矢に鈍足スキルを入れて鰐の足元に打ち込む。

すると、狙い通りに鰐のモンスターは足を痙攣させ移動速度をかなり落とした。

戦闘体制に入っただけは私だけではなかったようで、暗殺士の人がいっつの間にか鰐の後ろに回りこんでいて

両手に持った中剣で踊るように切りつけていた。

モンスターは暗殺士の人に狙いを定めたようで、後ろを振り向くとガバリと大きな口をあける。

そこに剣士の人が両手に持った大剣を上から下に振りぬき鱈のモンスターを真っ二つにした。

私たちの勝利である。

少し震える手を見て、モンスターの前でハイタッチを交わす暗殺士の人と剣士の人を見る。

私、弓使いでよかった・・・。

モンスターから金貨が出るわけでも消えるわけでもなく、ただそこに死体としてあり続けるのを見て魔法使いのサラディアさんが嘔吐していた。

その後はモンスターに会うこともなく無事に城までたどり着き、宿をとるときにあたりは真っ黒になっていた。

今後のことを考えて1部屋で済ませようと思っていたのだけど、宿屋の女将さんに1泊の料金を聞いたところゲーム内の価格と変わらず安く、レベル最高値まで勧めた私たちにとしては取るに足らない値段だったので各自1部屋ずつ宿をとることにした。

一人になって色々考えたいから丁度よかったかも。

宿の内装はベット1つに丸い小さな机一つのみ。

もといた世界のベットより硬く、寝心地は悪そうだったけど。精神的にも体力的にも疲れていた私は装備をすべて取り

ベットにダイブして1分もしないうちに眠りに落ちた。

次の朝、誰に起こされるでもなくムクリと上半身を起こす。

私は目覚まし時計より早く起きるタイプで、大体7時ごろにおきるようになっていた。

判を押したような生活を送ってきた成果だろう。

両手を上にあげ、うーん。と体を伸ばす。

しばらくボーっとした後、丸い机の上に容器に入った水があったので、それを使用して顔を洗った。

ベットに腰掛けてまたボーっとしてみる。

昨日は一人になって色々考えたいと思っていたけど、朝起きてぼつんと知らない世界に一人でいると、とたんに誰か知ってる人の傍にいたくなってしまった。

そう思うと本当に寂しくなって、すぐに兜をかぶり、装備を身につけ宿の一回にある食堂に向かう。

さっぱりした性格だと思ってたけど、私って結構甘えたりだったのかもしれない。

食堂に下りたとき、壁際の四角い4人がけの席に剣士と暗殺士の人が見界に入ってほっとする。

小走りで2人の元に向かうと、途中で気づいた剣士の人が手を振ってこっちに来いと合図をしてくれた。

「おはようございます。」

「おはよう。」

「おっはよー。」

私の挨拶に、2人とも挨拶を返してくれる。

「座って。今ちょうど、今後の話に移ったところなんだ。」
剣士の人が隣の椅子を引いてくれたので、そこに座る。

「思うに、現状で動けるのはこの3人だと思うんだけど。間違いないかな。」

剣士の人が真剣な顔で私に聞いてきた。
きっと戦闘になったときの事とその後の態度で判断したんだろう。

戦闘になったとき、私たち3人は瞬時に動けたけど後の3人は固まったように動かなかった。

魔法使いのサラディアさんは座り込み嘔吐までしていたから、そういう精神的に参っているだろう。

僧侶のキラさんは青ざめて、宿に着くまで剣士の人の腕を離さなかったし。

重剣士の人は終始無言だった。

3人の事を考えると確かに私は動けると思う。
剣士の人を見て、縦に首を振る。

ほっとしたのか、剣士の方は肩の力を抜いて笑顔でこちらを見て、よかった。と呟いた。

剣士の人の格好は昨日見た鎧姿ではなく、綿でできた普通の衣服を着ていた。

赤い短髪に金色の目、両耳には攻撃力UPになるピアスが合計5個ついていて、長身でガタイが良い。

改めてみると、お洒落で格好良い人だ。

「イケメンですね。」

その笑顔を見て私はポツリとつい思っていた事をそのまま言葉に出してしまった。

キャラクターを作る初期設定（元から用意されていた顔のつくり）は綺麗な顔のものだから、ゲーム中のプレイヤーはほぼ美男美女であつた。

だからゲームをしてるときは顔について特に思わなかったけど、いざ目の前で生身で動かれるとかつこよさが際立つというかなんと言うか。

わざと平凡に作り変えた私としてはちよつと後悔したりして。

不細工というわけではなくて、特徴のない顔といえいいのか、平均顔といえいいのか。素朴といえいいのか。

悶々していると、斜め前から視線を感じた。

視線の主は暗殺士の人で、自分を指差し興味心身に聞いてきた。

「俺は？俺もかつこよくね！？」

暗殺士の人も昨日見た装備ではなく、こちらも綿で出来た衣服を着ていた。

少し肩にかかるほどの銀髪で瞳の色は青色。剣士の人ほど長身じゃないけど、私よりも少し高い。

体の太さも私より少し大きいかなと思う細さだけど、着崩した服から少し除く筋肉を見ると

結構がつしりしているようだ。

カッコ良いというより、色気がある系？ホスト系？

まあ、見た目はこちらも良く、綺麗な顔をしていらっしやる。

私がかっこいい。というと。

だろ。と鼻歌まで歌いだす。

この世界を満喫しまくってますね……。うらやましい。

私がため息をつく、ふと思い出したように暗殺士の人はこちらを向く。

「ディディアちゃんの顔が見たい。」

「おいおい。勘弁してくださいよ。」

「別に見せるのは嫌じゃないんですけど。この流れで兜を取るの嫌です。」

落ちにされるのが目に見えているので遠慮します。

え。と言いながら暗殺士の人が席を立ったので、ビクリと反応してしまう。

まさか、強硬手段で兜をとるのか！？そこまでする必要がありますか！！！？

ひやりとしたその時。

「サイ、止めろ。」

剣士の人が、暗殺士の人を怒ってくれた。

暗殺士、サイはそんな剣士の人をニヤリと見た後、はいはい。と軽く返事を返し、席に座りなおしてくれた。

「すみません。私がアリスさんを格好良いと言ったから脱線してしまいましたね。話を元にもどしましょう。」

剣士の人はアリという名前だ。2人ともっと長い（暗殺士の人の変な）名前だったけど略して呼んでいる。

「そうそう、話を元にもどすけど。ディディア、本当に動けると考えて大丈夫か？」

本当かどうかはわからないけど、一応動ける戦力としてみてもらって大丈夫だろう。

私はもう一度首を縦に振る。

「よし。じゃあ、俺たち3人で今日は行動しよう。」

あとの3人はどうするのだろうか。まあ、昨日の様子からすぐに動ける状態ではないのはわかっていているけど。

「他の3人は・・おそらく、今日一日はこの宿から出たくないだろうな。」

彼ら3人の気持ちもわからなくはない。特に性転換してしまったキラさんの気持ちを考えると・・。

「で、考えたんだけど。今日は一度、ギルドをまとめる本部に顔を出してみないか？」

自分たちが所属するギルドがどうなったのか見てみたい気持ちはわかるけど、私ギルドに入っていないんですが・・。

とは言えず、首を縦に振る。ギルドに入っていないけど、一応他の人がどうなったか確かに気になるしね。

朝食を食べた後、席を立ち宿屋の扉を開けたところで暗殺士のサイが突然意見を変えた。

「やっぱさ、手分けして周りの状況探らねえ？」

「3人とも別々にか？」

「いや、俺だけ別。俺さ、ちょっと街に言って獣人の女の子・・じゃなくて聞き込みに言ってくるわ。」

なるほど、獣人の女の子を探しにいくんですね。

ゲーム内では獣人の種族もいて、猫耳に猫尻尾とかウサギ耳の女の美人さんとかいたからね。

生身で見れるのなら、私も一度は見てみたいけどさ・・。

「で？何を聞き込むんだよ。」

剣士の人はひっくり声でサイを睨み付ける。

「えーと。ほら、あれ。町の状況とか？物の価格とか？とにかく色々だよ！色々。」

いいだろー。とサイはすでに別行動する気満々だ。

剣士のアリは大きくため息をつく。

「わかった。ただ、手ぶらで帰ってきてみる、マジで殺すぞ。」

その言葉に、はいはいと手を振ってスキップでサイは街中へ消えていった。

「なんだろ。あいつが凄くうらやましく思える。」

「大丈夫。私もです。」

お互い顔を見合わせて少し笑う。

でも、サイさんのような存在がいてくれて精神的には助かっているかもしれない。

「じゃあ、行こうか。」

その言葉に私は首を縦に振る。

もちろん、アリの存在も大きく助かっていますよ。

3話

ギルドを束ねる本部は町の中心にある噴水の近くにあり、神殿のよ
うな建物なので迷うことなく私たちはたどり着けた。

ギルド本部は騎士団の駐屯所でもあるらしく、受付は騎士の格好を
した人が一人いた。

私たちがドアを開け中に入ると、その騎士はにこりと微笑んでくれ
た。

「いらっしやい。御用は何でしょうか。」

アリさんはその受付の人の前まで行くとグルリと本部内を見渡す。

「えっと。ギルド名が書かれている一覧みたいなのはありますか。」
その質問に騎士の人は困ったように笑う。

「ありますけど。一般の人にお見せする事は出来ませんよ。」

「けちだなあ。名簿ぐらい見たって何もないだろうと思うけど口には
出しません。」

「なら、”月見草”ってギルドがあるかどうか教えてもらおう事は？」

「それでしたら。」

アリさんが尋ねたギルドが存在するかどうか調べるために騎士の
人は手元の鉄板に手をかざし、何か呪文を唱えていた。

「残念ながら”月見草”というギルドは現在、存在してないですね。」

ため息をついたアリさんは、では、とその後と10〜20のギルド名を尋ねていたけど
一つも同じ名前のものは存在していなかった。

ふと、言葉に引っ掛かりを覚えた私は横から口を挟んで、騎士の人に質問をする。

「では、昔はどうですか？過去そういったギルドは存在してませんか。」

騎士の人は驚いた顔でこちらを見る。

「お、女の方でしたか。」

ああ、そうだった。私、兜をかぶってきちんと装備してる格好でした。弓も背負ってるし。

どうやら、このキャラクターを作ったときに考えていた事、”厳ついものを着ているが実は女！”が成功したようだ。
ちょっと嬉しい。

じっとこちらを凝視している騎士の人にアリさんは咳払いをして、サッサと調べてくれと催促した。

「あー、申し訳ありませんが。昨日の午前中に大きな雷が情報をまとめている施設に落ちてしまいました。

数年前まで更新がなかった情報はすべて飛んでしまったんですよ。残念ですが。」

私とアリさんは顔を見合わせる。

昨日の午前中といえば、私たちがこの世界にやってきた時と同じだ。何かの偶然だろうか、いやきっと関係している事だろう。

アリさんは腕を組んで少し考えた後、騎士の人に一つ質問をする。

「ここらで大きなギルドと言えどこですか？出来れば依頼を多く

受けている有名な所、信頼できるギルドがあれば教えてください。」
大きなギルドなら色々な人がいて、今回私たちがここにくる事になった原因について少しでも何かを知っている人がいるかもしれない。

騎士の人はその言葉にすぐ反応してくれた。

「ここから一つ東の通りにガザニアというギルドがあるんだけど、そこがお勧めですね。」

「ガザニア。一つ東の通りですか。」

「はい。そこは我々騎士団と直結しておりまして、騎士団の仕事、国の仕事も手伝ってもらうほど信頼の出来る大きなギルドでお勧めですよ。」

なるほど。確かに信用度No.1だ。

「ここは首都から離れた町だからギルドの建物も小さくて首を傾げるかもしれないけど、首都に行くとかかなり大きな建物でビックリするから。」

それに、この町にはそのギルドしかないからね。」

私たちは騎士の人にお礼を言って、教えてもらったギルドに向かう。

「ディディアは喋らないほうがいいよ。俺が交渉役になるからさ。」
あれ、私じゃないこと言いましたかね。
ちょっと反省。

「いや、違う。その、女の子だってバレると嫌な事とか余計なことありそうだしさ。」

しゅんとなった私を見て慌ててアリさんはフォローに回る。

そこまで心配されなくても、ムチムチのお姉さんとか美人の女の人

とか普通に街中歩いてたから
こんな見た目、男か女かわからないようなのを相手にする人はいないだろう。

「アリさん、実は心配性ですね。」

「うーん。そうかな。」

手を顎において首をかしげるイケメン。

頼りになってイケメンで強いとか。萌えです。

じっと見つめていた視線に気づいたアリさんは顔を赤くして慌てます。

「あー、とにかく！ディディアはしゃべらない事！俺が何とかするから。」

「でも、それじゃあ私ついてきた意味なくないですか。」

アリさんは首を横に振る。

「ある。大いにある。意見も聞きたいし。」
へらりと笑うと。

「一人じゃ不安だし。」

この可愛い生物は何だ！

「アリさん。抱きしめてもいいですか。」

思った事がつい口に出てしまった。

目を大きく見開いたアリさんは次の瞬間、ゆでだこになり
申し訳なく思った私は素直に謝って、アリさんが動き出すまで黙って空を見続ける事になりました。
アリさんは意外とウブ。

その後、私たちはガザニアで登録を済まして、ギルド員カードが出来るまで昼食をとることにして一旦、宿屋に戻ってきた。

「よう。丁度良いタイミングだな。」

宿屋に入り一回にある食堂を覗くと暗殺士のサイと重剣士と僧侶のキラさんの3人が昼食をとっていた。

「2人とも落ち着いたか？大丈夫か？」

アリさんがそう尋ねると、2人はやや青い顔で頷く。

重剣士の人は綿の衣服を着ていて身軽な服装をしている。

想像に違わず、ムキムキマッチョな人で、緑の髪と目をしていた。もちろん顔はほりが深くてカッコいい。

僧侶の巨乳金髪碧眼美人で中身男なキラさんは昨日私が上げた服をまだ着ていた。

あまり似合っていないし、胸がきつそうだ、現にボタン結構はずしてるから胸見えてるし。

「で、ギルドの方はどうだった？」

私たちは首を振る。

「変わりにガザニアというギルドにさっき登録を済ませてきたところだ。カードを後でとりに行かなきゃいけない。」

暗殺士のサイは頷く。

「俺は個人倉庫を調べてきたんだけどさ。」

ゲーム内で荷物は倉庫のあるところならどこでも出し入れ自由だっただろ？

でも、その場所自体がなかった。都市に行けば大きな倉庫があるって話だったけど

俺らの倉庫があるかどうかも怪しいし、あつたとしても俺たちはどうやってその倉庫が自分の物だって証明すりゃいいんだ？」

「証明するのは厳しいだろうな。」

「だろ？だから無いものとして行動しないとなあ。」

個人倉庫に置いていたお金と宝石や回復薬など色々をあてにしていた分だけショックだ。

お金がすぐに尽きるわけじゃないけど、今後のことを思うとギルドの依頼とか頑張ってこなしたほうがいいだろう。

「サイもこの後ガザニアで登録するか？」

アリさんの問いにサイさんはうーんと考えて首を横に振る。

「俺はもうちょっと、聞き込みしとくわ。」

なるほど、午前中では獣人が見つからなかったんですね。

昼食が届いたので兜の締め付けを緩めて下からサンドイッチを入れてでもそもそ食べていると

どこからか視線を感じたのでそちらを見てみる。

視線を感じる先には重剣士の人がいて眼が合った。

なんだろう、目をそらされては合わされて、こちらがよそを向くとずっと見られている感じがする。

この人も私の素顔が見たいのだろうか。

とった時のがっかり感が分かるので無視しておこう、そうしよう。

ギルドに登録しに行くかと重剣士の人と僧侶の人にも一応声をかけ

てみたけど、やっぱり首を横に振られました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6163z/>

気付けばゲームの世界

2011年12月20日19時50分発行